

自分タイム

—第4学年の実践—

川上公範

1 はじめに（自分タイムに期待するもの）

今、自己実現をめざした生涯学習の必要性が言われている。ここで大事なことは、生涯学習を可能にするための施設をいくら充実させても、一人ひとりが学び続けたいもの、追究し続けたいものを持っていないければ意味がないということである。この学び続けたいもの、追究し続けたいものは、自分の内面のより深い所に根を持つほど、学習は長く続き、全人格をかけたものとなる。そのため、自分の興味・関心のあることに没頭的に取り組む活動が大切になってくる。

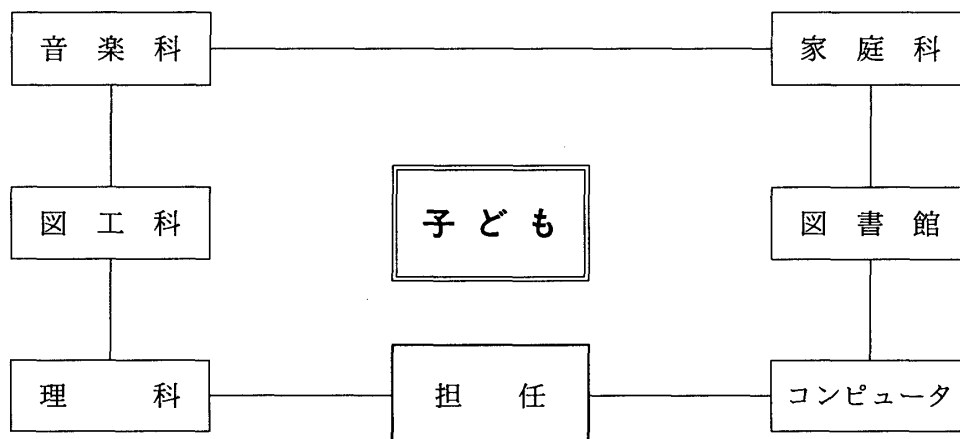
そこで本校では、これまでの教科・領域（道徳・特別活動）の枠にとらわれない一人ひとりの子どもの興味・関心や固有の経験に基づいた領域、総合的な学習（人間、環境、自分タイム、コンピュータ活用）を設けた。その中であって、自分タイムは範囲を子ども達の生活全体や生来の興味・関心にまで広げている。もちろん、子ども達が設定する課題の中には、教科・領域や他の総合的な学習の発展内容もあるが、それもその時点において、その子どもの一番追究したいことと考えている。

この学習（他の総合的な学習も含まれる）を経験することが、今後中学校・高等学校の課題選択学習や選択履修へとつながっていくことを期待している。

2 教師の支援体制

自分タイムは、「自分見つけ」の学習である。そのため、自らの課題を設定し、自らの方法で、自らのペースで、失敗を恐れず自分なりに結果を出し、自らの方法で表現する事を原則とする。教師はあくまで支援者である。

そのため、子ども達の課題は多岐に渡る。それに担任1人が対応していたのでは、大変であるし、一人ひとりの子どもに対しても十分な支援を行えない。そこで本校では、担任と専科教官とがネットワーク体制を取り対応している。それにより、子ども達は自由に相談にのってもらえるだけでなく、各教室の器具の使用や安全が保障されるのである。担任と専科教官とは、後で説明する計画表でつながれている。



教師のネットワーク体制

3 学習計画

学習の性格上、オリエンテーションを充実させ、しっかりとした計画を立てさせることが大切となる。表1は、オリエンテーションのときと最後の振り返りの時に記入するものである。オリエンテーションでは、前回やったことの振り返りや上級学年の作品紹介を行う。また今、「自分はいったい何を求めているのか」という“もうひとりの自分”と対話させることも大切である。表2は、裏面であるが、毎回の振り返りを行うときに記入するものである。内容は、今日行ったことと次回の予定である。

チャレンジすること
名前()

チャレンジすること																					
内 容	-----																				

活動方法	-----																				
まとめ方	-----																				
準備物	-----																				
活動予定	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>1回</td> <td>()回</td> <td>活動</td> <td>()回</td> <td>1回</td> </tr> <tr> <td>学校()</td> <td>行</td> <td></td> <td>ま</td> <td>見</td> </tr> <tr> <td>家()</td> <td>来</td> <td></td> <td>と</td> <td>ま</td> </tr> <tr> <td>合計()</td> <td>回</td> <td></td> <td>回</td> <td>会</td> </tr> </table>	1回	()回	活動	()回	1回	学校()	行		ま	見	家()	来		と	ま	合計()	回		回	会
1回	()回	活動	()回	1回																	
学校()	行		ま	見																	
家()	来		と	ま																	
合計()	回		回	会																	
ふり 返り	-----																				
感想	-----																				
先生から	-----																				

表1

チャレンジふり返り表
名前()

	月日	活動場所	活動内容	次時の予定
①	月日			
②	月日			
③	月日			
④	月日			
⑤	月日			
⑥	月日			
⑦	月日			
⑧	月日			

表2

4 子どもの実践について

前期（6月中旬，8時間扱い）と後期（11月下旬，7時間扱い）に1回ずつ行った。子ども達の取り組みの様子は，1回目は「自分のやってみたいことをやりなさい」と言われても，「何をやらよいかかわからない」といった感じで10人あまりのグループも現れた。しかし，1回目の終了時の反省では，たくさんの人数でやることの効率の悪さにすでに気づいていた。内容の特徴としては，「図書館の本の冊数調べ」が見られたが，これは，机についてじっとしてやるのではなく，体を使った活動や自分の効力感を感じたいという欲求から生まれたものだと考えられる。子ども達は，机についてじっと知識を吸収していく学習よりも体全体を使った学習を求めているのだろう。この面から考えて，自分タイムの重要性を再認識した。

2回目の傾向として挙げられるのは，コンピュータが活用できるようになったということもあって，インターネット利用やお菓子づくりといった幅広い内容となった事である。ポケモンをやることに一見価値はないように見えるが，コンピュータを操りインターネットを呼び出している姿は，これからの若者ならではの姿である。また，内容が何であれ，没頭体験をするということが人間の成長

にとって重要であることを考えると、あながち無駄ではないと思われる。前期・後期続けてポケモンを課題とした子どもは、3名いたが、この子達が次の課題へと進むときには、一回りも二回りも人間的に大きくなっていることだろう。子ども達の前期後期における課題の変容を載せる。

子ども達の課題の変容

No	前期	後期	No	前期	後期	No	前期	後期	No	前期	後期
1	花札	→ ポケモン	11	花札	→ 宇宙	21	ごみ問題	→ 音楽の歴史	31	花言葉	→ 日本の歴史
2	ポケモン	→ ポケモン	12	図書室の本の冊数	→ ポケモン	22	花	→ お菓子づくり	32	図書室の本の冊数	→ お菓子づくり
3	花札	→ 日本の歴史	13	カブトムシ	→ セキセイインコ	23	水	→ 不思議な疑問	33	広島県の祭り	→ 昔のお金
4	森林問題	→ 姫路城	14	恐龍	→ ポケモン	24	ことわざ	→ 算数の歴史	34	広島県の祭り	→ 日本の歴史
5	花札	→ ポケモン	15	ごみ問題	→ ポケモン	25	各県の特産物	→ 天気	35	みかんとりんご	→ 漢字のでき方
6	将棋	→ 日本の歴史	16	点字	→ パズル	26	図書室の本の冊数	→ お菓子づくり	36	花札	→ 昔の道具・服装
7	恐龍	→ ポケモン	17	ポケモン	→ ポケモン	27	宇宙	→ 他国の料理	37	サボテン	→ サボテン
8	図書室の本の冊数	→ ポケモン	18	ごみ問題	→ ポケモン	28	図書室の本の冊数	→ 日本の歴史	38	ことわざ	→ お菓子づくり
9	図書室の本の冊数	→ ポケモン	19	ポケモン	→ ポケモン	29	花の種類	→ お菓子づくり	39	カナダ	→ 物語づくり
10	図書室の本の冊数	→ ポケモン	20	花札	→ お菓子づくり	30	花札	→ お菓子づくり			

5 実践を振り返って

(1) 掘り起こしについて

日頃からいかに自分起こしを行っているか。いかに感性を豊かにしているか

各教科において、自主的に学習が進められる子どもや、自主勉強に取り組む前向きな子ども、日記などで身の回りの出来事や社会の出来事に関心の持てる子ども、自分を見つめ振り返りのできる子どもは、課題を決めるときスムーズに行え取り組みも意欲的であった。その反対に、学習場面において、受け身的な子ども（塾通いなどレールに乗った生活をしている子ども）や、基本的な生活習慣の十分身につけていない子どもは、友達に追従したり、途中でテーマを変更するなどの様子が見られた。前テーマ「豊かな感性を育む」を受け、今年度から「自立に向かう子どもたち」へ変えたのであるが、感性の掘り起こしはいつまでも土台となっていることを改めて感じた。

(2) 資料について

自分にあった資料を複数集め構想を練ることの大切さ

子ども達の取り組む姿を見て、資料収集の難しさを感じた。というのは、子ども達が、公共機関や家から持ってくる資料は、大人向きに書かれたものが多い。子ども達も手におえないので、資料を丸写ししている。そのため、時間の経過とともに意欲を徐々に減退させていた。中には、途中で頓挫してしまう子どももいた。また、一冊あるいは少数の資料からまとめようとする子どもの活動も同じ結果になりやすかった。これでは、総合的な学習のねらいとしている「自分との関わりにおいて、総合的に判断する力を育てること」ができない。資料は、わかりやすい資料をできるだけ多方面に渡って集め、総合的に判断していくことが大切である。

(3) 体験について

追究過程においても直接体験を重視する。そのため家庭学習としての性格ももたせる

子ども達は、他教科の調べ活動などの経験から、本やパンフレットなどの資料を総合的に利用していた。この活動から子ども達は、いろいろな知識を得ることができると思われる。それは確かに重要であるが、子ども達にはもっと直接体験を通した実感をもたせる必要があると考える。学校内の授業であるので制約も多いが、地域社会への活動範囲を広げさせたいと思う。体験活動を保障する手立てとしては、

- ① 学校内の環境・施設を整備する
- ② 家庭学習としての性格をもたせ活動範囲を広げる
- ③ 地域社会の利用マップおよび活動手引きを作る

が考えられる。

(4) マンネリ化の防止

「学び」の意味や個性の尊厳性について気付かせる取り組みを継続する

1回や2回の取り組みなら子ども達も興味を持って活動すると思われる。しかし、さらに回数を増やしていくにつれマンネリ化の恐れが出てくる。学習本来の意味を理解させることや個性の尊厳性について気付かせていく取り組みも並行してやっていく必要がある。

6 おわりに

年2回の活動であったが、授業として組まれているから行うというのではなく、日常活動として取り組めるようになるとすばらしいと思う。この学習のねらいを改めて言うと、受け身の学習（やらされる）ではなく、自分の興味・関心のあることに自主的・自発的に取り組んでいく態度を身に付けることである。この態度からキラリと光る個性が見えてくるのである。しかし、その道程は厳しい。自分が立てた計画をやり遂げる強い克己心を育てるため、これまでの子どもと教師との関係の意識を変えていく必要があるかもしれない。

子ども達がおかれている生活を見てみると、塾・習い事と自由な時間の少ない日々を送っている。この現状に風穴をあける意味でも、自分タイムの充実を多方面から図らなければならないと考える。